

日本刀と剣道

吉村哲夫*1・松田周二*2・松田周平*3

Japanese Sword and Kendo

by

Tetsuo Yoshimura, Shuuji Matsuda, Shuuhei Matsuda

I. はじめに

本稿は、2022 年 11 月 15 日に東海大学湘南キャンパスで開催された東海大学体育学部セミナーでの講演「日本刀と剣道」の内容に若干の加筆・修正を加えたものである。セミナーの講師は、千葉県無形文化財保持者¹⁾で日本刀の普及活動にも携わっている松田次泰刀匠（本名、周二）（写真 1）と吉村哲夫（体育学部武道学科教授）である。セ

ミナーは zoom ミーティング方式で行われ、初めに松田から「日本刀とは何か」というテーマで、日本刀の社会的評価や文化的価値、次に日本刀の素材や作り方、そして日本刀の見方について紹介された²⁾。

続いて吉村から「日本刀に学ぶ剣道」というテーマで日本刀の刀法と剣道の打突技術がどのように関連するのかを「試し切り」を通じて考察した成果が映像を用いて紹介された。

* 1 東海大学体育学部武道学科

* 2 刀鍛冶 千葉県無形文化財

* 3 東海大学体育学部非常勤



写真1 松田次泰刀匠

Ⅱ. 日本刀とは何か

1. 日本刀の現在

1) 刀剣ブーム

現在、日本刀はメディアで取り上げられる機会が多くなっている。最近では、日本刀を擬人化した「刀剣乱舞」というゲームを通じて日本刀にも関心を持つ人が増加し、日本刀の鑑賞会が多数の参加者で溢れる「刀剣ブーム」が起きている。

このブームを反映してか、岡山県瀬戸内市が「山鳥毛里帰りプロジェクト」と銘打ったクラウドファンディングによる日本刀の買い付けで5億円を募集したところ、これを大幅に上回る8億円が集まった³⁾。また、三重県桑名宗社(春日神社)では、宝刀村正の写しの制作費の一部400万円を募集したところ1,800万円が寄付されており日本刀に関する関心が高まっていることを示していると考えられる⁴⁾。

2) 「国宝」の約1割が日本刀

現在、日本の国宝指定件数は1,131件であるが、その約1割に当たる119件が日本刀であり、平安・鎌倉時代の作品がほとんどである。また、日本刀は室町時代に本阿弥家が定めた基準を基に国宝・重要文化財・重要美術品・特別重要刀剣・重要刀剣・特別保存・保存の順でランク付けがなされており、重要刀剣以上の刀が名刀と呼ばれている。現在、263万本登録されている刀の中で名刀は約1万本であり、刀鍛冶は鎌倉時代の作品を目標として刀を作っている。

3) 刀鍛冶の資格と日本刀の登録

刀鍛冶(刀工)になるには刀匠資格を有する刀

鍛冶の下で5年以上の修行を経た後に実技試験を受け、合格者が文化庁から認定を受ける必要がある。また、日本刀には1本ずつ「銃砲刀剣類登録証」が付されており、この登録証が付された刀であれば誰でも所持することが認められている。

2. 和鉄と日本刀の作り方

1) 玉鋼(たまはがね)

日本刀は砂鉄と木炭を原料とする「たたら製鉄」法で作られる玉鋼と呼ばれる和鉄から作られる⁵⁾(図1)。戦後、日本刀は文化庁によって玉鋼を使った「美術品として価値のある刀剣類」と定義され、和鉄以外の材料を使うことは禁じられている。鉄鉱石とコークスで作られる洋鉄は日本刀の材料として認められていない。和鉄は洋鉄の鋼と比較して、より多くの酸素を含んでおり、軟らかく、粘りがあり、くつつきやすい特徴を持つために折り返し鍛錬がしやすくなる。また、錆びにくいという特徴を持っている。



図1 玉鋼(たまはがね)

2) 鍛錬

刀鍛冶の最も重要な仕事が鍛錬である。熱した鉄を叩き延ばして6寸ほどに延びたら横に整(たがね)を入れて割り折り返す。次に縦に割り、それを折り曲げ重ねて叩き延ばすと、次の回ではまた横に切り割り折り曲げて叩き延ばす。この作業を繰り返すことによって折り返し層が作られ、刀が折れにくくなる。さらに、まばらにある炭素などを散らして炭素量を調整することに繋がる。

3) 焼き入れ

刀に土置きをして、変態点まで加熱して水で急冷させる技術を焼き入れという。鉄を800℃から900℃まで加熱した後、水に入れて急冷して刃先だけを焼き入れる。焼刃土を厚く塗ったところは焼きが入らず、焼刃土を薄く塗ったところに焼きが

入り、その境目に刃文ができる。冷やす水の温度やタイミングが非常に大切であり職人の勘に頼る作業となる。また、土は粘土を使用するが、粘土の良し悪しは刀づくりにも大きく影響する。そのため、刀の産地は焼き物の産地としても知られている。

3. 日本刀の見方

1) 姿の変遷

日本刀はその姿によって作られた時代がわかる。「平安時代末から鎌倉時代初期」・「鎌倉時代中期」・「南北朝時代」・「室町時代前期・後期」・「安土桃山時代」・「江戸時代初期から中期」・「江戸時代末期」と時代を経るにつれて刀の大きさや反りが変わってくる。反りの深い刀ほど作られた時代は古い。また、太刀は刃を下にして帯につるすものであり、「佩く」と表現される。一方刃を上にして帯に差すのが刀であり打刀（うちがたな）ともいう。

2) 「匂い口」刃文と地鉄（地肌）

刀は光に透かして刃文を見るが、その刃文のことを匂い口という。この刃文のありかたが、その刀の焼き入れの具合を反映している。日本人は刀の刃文に美しさを求めてきた。刀鍛冶が和鋼の金属組織にどのように働きかけるかによって美しさが表現される。昔はろうそくの光に透かして刀を見たが、今は白熱電球に透かして刀を見る。刃文で大切なのは形だけでなく「沸え（にえ）」と呼ばれる質である。光に透かして明るく輝いて見える刀を名刀という。刃文や地肌は鍛錬の段階から予測して作られる。地肌が見える刀が折れにくく強い刀であり、刃物としての機能と美しさが一致する。刀の地肌には板目肌（いためはだ）と柃目肌（まさめはだ）などがあり、木の家と同様に肌目を鑑賞する。

4. まとめ

- 1) 日本刀は、現代では特に美術工芸品としての価値が評価されている。
- 2) 平安・鎌倉時代の名刀が最も高く評価されている。
- 3) 日本刀とは機能性・美術性・精神性を兼ね

備えた、和鉄で作られたものづくり技術の粋を集めたものである。

Ⅲ. 日本刀に学ぶ剣道

全日本剣道連盟は、1975年に剣道の理念を「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」と定義し、刀の操法を学ぶことを通じて人間性を高めていくことが重要であると指摘している。

また、2007年には同連盟によって「剣道指導の心構え」が公表され、剣道の修練を通じて竹刀と心身の一体化を図ることの重要性が示されている。

1. 有効打突における「刃筋」

剣道の試合審判規則では「有効打突は、充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し残心あるものとする⁶⁾」と規定されており、「刃筋」の通った打突は剣道の技術の要であると言える。しかし、竹刀は4つ割りの竹で構成され形状が丸く厚みもあり、打突した際の刃筋を確認することが難しい。

「刃筋正しく」は、刀法では「刃筋を立てる」ことを意味しており、刀の進む方向と刃の向きが同一線上にあるようにしなければならない。また、力の入れ方では刀の峯の部分を上から押すような振り方ではなく、「刃の部分を持って引っ張る」「小指の側に力を入れて締める」感覚が重要である。

2. 試し切りを通じた考察

刀を刃筋正しく有効に振ることができているかどうか確認するために、支柱に立てた「竹」を使って真剣による試し切りを行った。

1) 竹刀で「打つ」・刀で「切る」

竹刀での打突では当たった瞬間に手の内を締めて竹刀を止める動きをするが、刀でものを切る場合には、止めずに切り下さなければならない。剣道の高段者でも初めて試し切りを行う際は、この要領が掴めずに上手く切れないことがある。また、試し切りの場合は、安全のために振り下ろす刀の向かう方向の足を手前に引くことがあるが、剣道では中段の場合、右足を常に前に出した状態

で打突動作を行うことが多く、足さばきにも多少の違いがある。

2) 剣道の動きに合わせた切り方

(1) 切り返しの要領で切る

剣道の基本的な練習法に「切り返し」があるが、右足を常に前に出した状態で左右面および左右の胴を打突する要領で試し切りを行った。剣道の切り返しの要領での試し切りは刃筋を正確に立てることがかなり難しいことが確認された。

(2) 正面を真っ直ぐに切る

試し切りでは、通常は支柱に真っすぐに立てた巻き藁や竹を斜めに切ることが多いが、今回は斜めに竹を立てる支柱を作り、剣道の正面打ちの要領で試し切りを行った(写真2)。この切り方は剣道で最も多く用いられる竹刀を上から下に真っ直ぐに振り下ろす動作であり、刃筋を通った打ち方であるかどうかを確認することができる。



写真2 正面切り

(3) 押し切り

通常、刀で切る場合は、対象に当てた刀を手前に引く「引き切り」をすることになるが、竹刀による打突では前方に踏み込んで体を移動しながら打突する場合が多い。試し切りで対象に触れた刀を前に押すように用いても「引き斬り」と同様の動作ができることを確認した。

(4) 引き技

剣道における鏝競り合いから後方に下がりがら引き技を打つ「引き面」および「引き胴」による試し切りが可能であることを確認した。

3. まとめ

- 1) 試し切りによって刃筋の正確さを明確に確

認できることが分かった。

- 2) 剣道の練習で行っている「切り返し」の動作を試し切りで行うことは容易ではない。
- 3) 試し切りで身につけた刀の操法は剣道の技術向上にも十分に役立つと考えられる。

日本刀は千年の歴史を超えて現在に受け継がれ、美術工芸品として高く評価されている。一方、日本刀との関連が深い剣道の世界では、日本刀の精神性や技術を学ぶことが重要とされているが、時代と共にそうした意識が失われつつあるように感じられる。今一度、剣道を、原点に立ち返って見直す必要があるのではないだろうか。

注

- 1) 刀匠 松田次泰オフィシャル Web サイト
<https://matuda-katana.com/> (2022 年 11 月 10 日アクセス)
- 2) 松田次泰(周二)(2017)名刀に挑む - 日本刀を知れば日本の美がわかる - .PHP 新書, pp. 104-146.
- 3) 朝日新聞デジタル版朝刊記事 (2022 年 6 月 12 日)
- 4) 朝日新聞デジタル版朝刊記事 (2020 年 2 月 11 日)
- 5) かつきせつこ・松田次泰 (2016) 日本刀・松田次泰の世界 - 和鉄が生んだ文化 - 雄山閣, p8
- 6) 全日本剣道連盟 (平成 31 年 4 月 1 日) 剣道試合・審判規則, P8